元豊三年（一〇八〇年五月）四十五歳、定恵院から臨皐亭に移つての作。

遷居臨皐亭

我生天地間
一蟻寄大磨
區區欲右行
不球風輪左
雖云走仁義
未免違寒餓
劍米有危炊
鍼氈無穩坐
豈無佳山水
借眼風雨過
歸田不待老
勇決凡幾箇
幸茲廢棄餘
疲馬解鞍馱
全家占江驛
絶境天爲破
饑貧相乗除
未見可弔賀
澹然無憂樂
苦語不成些

臨皐亭に遷居す

我の天地の間に生まれたるは
一蟻の大磨に寄するなり
区々として右より行かんと欲すれども
風輪の左よりするより球はれず
仁義に走ると 云うと雖も
未だ 寒餓に違はるるより免れず
剣米 危炊 有り
鍼氈 穩坐 無し
豈に佳き山水 無かりしならんや
眼を借すこと 風雨の過ぐるがごとくなりき
田に帰ること 老を待たざるに
勇決するは 凡そ幾箇ぞ
幸 に茲に 廃棄の余
疲馬 鞍馱を解く
全家 江駅を占めたるは
絶境 天 為に破れるならん
饑貧 相乗除すれば
未だ 弔賀すべきを 見ず
澹然として 憂楽 無きに
苦語 些を成さず

【語釈】○**臨皐亭**…皐は皋に同じ。黄州城南一里ばかり、亭下数十歩足らずで江水が流れており、蘇軾はこの水の半ばは故郷峨眉山の雪融けの水かと感慨にひたりつつ、飲食に沐浴に汲み取ったという。もと回車院とよばれる江畔の駅舎であったものを与えられた。○**一蟻寄大磨**…磨はひきうす。晋書の天文志に日月の年周運動を説明するのに、左旋（させん）、すなわち左から右へ回転しているひきうすの上に、右から左へ向かって歩いている蟻を考えると、ひきうすの回転がはやいから、蟻は左から右へ回っているようにみえる、という記事がある。○**区区**…わずか。また、ちいさいさま。○**右行**…中国の天文学で左旋（させん）・右旋（うせん）というテクニカルタームがあり、恒星（こうせい）は左旋、日月は右旋である。蟻とひきうすとの関係が、天（恒星）の左旋と日月の右旋の関係にみたてられているので、右行とは右より左へ行くことと解した。○**不球**…球は救に通じる。すくう、とめる（止）。○**風輪**…仏教でこの世界の最下底をいう。楞厳経（りょうごんきょう）にみえる語。○**雖云**…～ではあるけれども。○未免…いまのところまだのがれられないでいる。○**違**…そむく、さける。○**剣米・危炊**…晋書の顧愷之（こがいし）の伝に、桓玄（かんげん）と殷仲堪（いんちゅうかん）とがはらはらするような話をとりかわす。桓玄がいうのに、矛の先に坐って米をとぎ、剣の光に坐って炊く、と。○**鍼氈**　鍼のついた毛氈。晉の杜錫（とせき）がしばしば太子を諫（いさ）めたので、うるさがった太子は、杜錫の坐る毛氈の中にはりを入れておいたので、足を刺して血が流れた。○**風雨**…あらし。岑参の詩に「渭上に風雨過ぐ」。○**凡**…みなで。○**廃棄**…すてる。ここは人生における廃棄。廃残の身。○**鞍馱**…馬におく鞍と積み荷と。○**全家占江駅**　江駅については臨皐亭の注を参照。弟の蘇轍のもとにあずけてあった家族は、この詩を作る前日、蘇轍にともなわれて黄州に着いた。蘇軾は巴河口（はかこう）（黄州から11キロメートルあまりのところ）まで迎えに出た。「暁に巴河口に至り子由を迎う」の詩がある。○**絶境**…世と隔絶した土地。陶淵明の桃花源記に「先世秦の乱を避け、此の絶境に来る」蘇軾が徐州で作った「秦太虚 参寥と松江に会す」の詩に「客を送って今朝西北の風、絶境自ら千里の遠きを忘る」○**天為破**…為の下に我が省かれている。為我、我が為めに。○**乗除**…韓愈の三星行に「善無きも名已（すで）に聞こえ、悪無きも声已に譴（かまびす）し。名声相乗除せば、得失少（すこ）しく餘り有り」○**擔然**…淡然。○**苦語**…「孟郊の詩を読む」に「苦語は詩騒に余る」　○**些**…楚辞の招魂。「魂兮帰来、東方不可以託些（さ）」のように脚韻字ごとの下に些という助辞がある。楚の地で巫（とうじ）の禱辞に用いられた語を採ったものといわれる。はやしことばである。

【通釈】

この天地の間に生まれ出たわたくしの人生は、大きなひき臼の上にのっかった一匹の蟻なのである。ひき臼の上をよちよちと右から左へ歩いてゆこうとしても、所詮、左から右へ大きく回転するこの世界の動きから脱却できるものではない。

まさにそのためか、仁愛と正義とを目指して進んでいるつもりのわたくしであるのに、それとうらはらに、寒さと飢えからのがれえないでいる。日々の生活はまるで剣のきっ先に坐って米をといで炊くようなあぶなっかしさの連続、まったく針の座布団に坐らされているようなもので、くつろぎの瞬間とてもない。

これまでに隠退するに相応しい山水に出会わなかったわけではないが、それに対するわたくしの眼の注ぎかたは、あたかもその山水を吹き過ぎ通り過ぎる風か雨かのごとくであった。帰田の計をたてるには、なにも老年を待つことはないのだが、かといって、勇気をもってはやくそれにふみきれる人は、いったい何人あることか。

廃残の人生、その余年の旅路において、ここ黄州に疲れきった馬の鞍と荷を解いて息う、こととなったのは、まだしもの幸せ、それに一家そろっての住まいに江畔の宿駅があてがわれたというのも、世と隔絶しているこの地の壁を、天がわたくしのために打ち抜いてくれたのであろう。

とはいえ、家族を迎えたことは、それによって加わる飢えと貧しさとを考えて、乗除してみると、いったい悔やんでよいことやら、祝ってよいことやら、今のところわからない。淡然たる心境で憂いも楽しみも超越したつもりでいるのに、詩を作ってみると言語はしぶりがち、この楚の地の民歌のようなのびのびとしたリズムには成らない。

「蘇東坡」近藤光男より抄出